

タイトルの「教育とは炎を燃え上がらせることであり、入れ物を埋めるようなものではない」というのは、古代ギリシャの哲学者ソクラテスの言葉です。

「教育」という言葉から、私たちはどうしても、子どもたちを「教える育てなければ」と考えてしまいがちです。学校教育も現在変わりつつあるとはいえ、まだまだ、教える側にとっての「目標」や「ねらい」がしっかりとあり、それに到達するように子どもを導くことこそが教育であるという考えが一般的であり、いわば、「子どもという入れ物にいかに知識をつめこんでいくか」のような教育がなされています。もちろん、それがすべて悪いというわけではありません。気候変動、環境問題、あらゆる差別や貧困、戦争や平和など、子どもたちだけでは知り得ない知識や考えは丁寧に伝えて一緒に考えていかなくてはならないこともたくさんあります。

それでは、「炎を燃え上がらせるような教育」とはどんな教育なのだろうと考えた時に、一つの絵本が浮かびました。私の大好きな絵本の一つ『てん』（ピーター・レイノルズ 谷川俊太郎 訳）です。



『てん』の内容をご紹介します。(機会があれば、ぜひ絵本を読んでみて下さい)

主人公はワシテという女の子です。お絵描きの時間が終わっても何も描けないままイスに座っていたワシテ。先生は真っ白な紙を見て、「あら！ ふぶきのなかのほっきょくぐまね」とユーモア混じりに声をかけます。ワシテは「やめてよ！ 描けないだけ」と答えます。

先生は、にっこりして「何かしるしをつけてみて。」という、ワシテはマーカーをつかんで紙に力いっぱい押し付けて「これで どう！」といいます。

先生はその紙をとりあげて、「ふむむむ」とじっくりと見つめます。そして、その紙をワシテの前に置いて、「さあサインして」といいます。ワシテは「絵は描けなくても名前ぐらいサインできるもん」とサインします。

次の週、お絵描きの教室に入るとワシテはびっくりします。ワシテが描いた「てん」の絵が立派な金色の額に飾られていたからです。ワシテはそれを見て、「ふーん！ もっといいてんだって私描けるわ！」とこれまで開けたこともなかった水彩絵具のセットを開けて、ワシテはいろんなてんを描きまくりました。たくさんの色のてん、色を混ぜていろんな色のてんと試し続けます。「小さなてんが描けるなら大きなてんも描けるはず」と大きな筆で大きな紙に大きなてんをいろんな色で描いたり、てんを描かないでてんをつくる(表す)ことまでやってのけます。

そして、何週間か後の学校の展覧会で、ワシテのてんは大評判となります。

その展覧会でワシテは小さな男の子に声をかけられます。「おねえちゃんは本当にすごい絵描きだね。僕も描けるといいんだけど」と。ワシテは「描けるわよ」といいます。男の子が「ぼくが？ だめだよ。定規を使ったらまっすぐな線が描けないんだ」というと、ワシテはその男の子に白い紙を渡して「やってみて」といいます。

男の子が線を引こうとすると、鉛筆がぶるぶる震えます。ワシテは、そのくねくねした線をじっと見つめます。そして、その男の子に向かって、「おねがい…サインして」といいます。

(実は、この絵本『てん』は3部作になっています。2作目『つばい』は、この最後に登場した男の子が主人公となり、3作目『そののいうって』は、その男の子の妹が主人公のお話です。ぜひあわせて読んでみて下さい。)

いかがですか？ ワシテの先生がワシテにしたことは何だったのでしょうか？ 一般的な教育(指導)と考えられるような、お手本を見せたり、絵の描き方を教えたりして、ワシテに絵を描かせたわけではありませんね。「絵なんか描けない…」と思っているワシテに対して「なにかしるしをつけてみて」と今すぐ簡単にできそうなことを促し、そして、それをじっくり見た後で、自分のサインを残すよう促しました。「先生がワシテに求めたこと」は、たったそれだけのことです。その後、先生は、ワシテの絵を立派な額に入れて飾りました。目に見えて先生がしたのはそれぐらいです。

しかし、ここからわかるのは、この先生はワシテの気持ち、ワシテの絵をととても大切に扱っているということです。絵が描けないでいるワシテのことを否定的に捉えることなく、むしろ肯定的に受け止めています。ワシテがつけたてんを、とても素晴らしいものとして扱いました。それらのことが、「私、もっといいてんだって描けるわ！」とワシテの心に火をつけたのです。この絵本の作者もあとがきで「先生は私に『自分のしるし』をつける勇気を与えてくれた」と記しているように、「やる気」と「勇気」を起こさせたと考えられます。そして、ワシテは自分でいろんなてんを描いてみては、考え、試し、たくさんのてんを描きまくりました。これこそ、まさにソクラテスのいう「炎を燃え上がらせるような」教育ではないでしょうか。

この絵本『てん』に描かれている教育の在り方と私たちの目指す保育の共通点、なんとなくご理解頂けますでしょうか。私たちの園での取り組みの一つ「ラーニングストーリー」も、子どもたちのおもしろい姿、すてきな姿、子どもってなんでこんなことするんだろうと大人の予想を超えた姿を大切に、否定的に捉えるのではなく、肯定的に捉え、出来る・出来ない、早い・遅いといった評価抜きに温かなまなざしで見守ることを大切に考えています。それらを丁寧に記録として残していければと思っています。子ども達の探求心、自らの物語を紡いでいく力が燃え上がることを願って…。